



Parkinson 病は神経疾患の中で最も有名な病名の一つです。もちろんこの病名はイギリスの医師 James Parkinson の名前に因んでいます。

James Parkinson は、1817 年に *An Essay on the Shaking Palsy* という小冊子を出版しました。この本は希少であり、全世界に数冊しか残っていないそうです。でも復刻版や内容を紹介した書籍は多数あり、その一つである「パーキンソン病の原著と全訳（豊倉康夫編著）」なる小冊子を、著者のおひとりと、元東京大学教授萬年徹先生からいただきました。写真がその本で、昭和 57 年の第 3 版（初版は昭和 49 年）、私の宝物です。

この Essay の中で、Parkinson は 6 人の患者を提示し、この疾患の臨床症状とその経過を詳細に記載しています。彼は neurologist ではなかったので rigidity という神経診察でしか捉えられない所見は記載されていませんが、それ以外の、ほぼ全ての症状を驚くほど正確に描写しています。でも私が最も感銘を受けたのは、その PREFACE です。「自分は専門外なので、この病気のことにはわからないが、このような不幸な病気があるということを世の中の諸賢に気がついて欲しい。そしてこの病気を研究し、治療法を見つけて欲しい。」そういう彼の医師としての魂の叫びが聞こえるからです。

私たちは医師になったときに、何か一つでも自らの力で病気の原因や治療法を発見したいという気持ちを持ちます。でも大半の医師は、そのような機会も才能もなく老いていきます。そこで諦めてしまうのではなく、この病気で苦しむ気の毒な方々を、誰か助けてあげて欲しい、せめて自分の発言がその契機の一助にでもなれたら、という気持ち。そのために Parkinson は自らの診療所を受診した患者だけではなく、道ですれ違った患者にも声をかけて、その苦痛の日々を詳しく聞き取って紹介しているのです。

ところが、この書物は、誰からも注目されることなく、歴史の中に埋もれていくところでした。それを世界の注目の場に掲揚したのが Jean Martin Charcot です。彼は 1887 年の火曜講義の中で、この疾患を取り上げました。この病気が常に振戦を伴うわけではなく、筋力も保持されることから、Shaking Palsy という病名は適切ではない、と主張しました。そして Parkinson のこの著書を取り上げて絶賛し、この疾患を Parkinson 病と呼ぶことを提唱したのです。

「世に伯樂あり、然るのち千里の馬あり。」すぐれた業績は、それを見出し、世に知らしめる人が不可欠です。